

# GLOBE

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp>

国際文化研究科 広報

No. 33

Sep 2020

## Contents

- 02 研究科長メッセージ
- 03 特集：本研究科の  
新型コロナウイルス感染症  
への取り組み
- 08 産学連携共同研究の紹介
- 10 修了者からのメッセージ  
曾 曾さん  
菅原 優花さん
- 11 退職教員からの言葉  
市川 真理子 教授  
川平 芳夫 教授  
佐藤 勢紀子 教授
- 13 新任教員紹介  
ジスク・マシュー 准教授  
受賞報告
- 14 最近の著作から
- 15 科研費採択一覧
- 16 INFORMATION
  - キャリア講習会
  - 第26回公開講座  
「国際文化基礎講座」  
「近代フランスの  
外交と異文化理解  
—幕末日本と脱植民地化期のアフリカー—
  - オンライン入試説明会
  - 入学試験情報

## 研究科長メッセージ

2019年末に中国・武漢における流行が報じられてから、瞬く間に新型コロナウイルス感染症は限られた地域の流行(エビデミック)から世界中に拡大(パンデミック)しました。私たちはまさにパンデミックの発生と広がりケース・スタディとも言えるものを目の当たりにしていることになります。世界中で約1,800万人が感染し、およそ69万人の死者が出ています(2020年8月3日現在)。日本国内では、春先の第一波を経て、この文章を書いている8月において第二波の到来を迎えているように思えます。

私たち国際文化研究科でも4月からの新学期の授業をどうしようかと思案し始めた3月、アメリカの大学で働く私の知人からその大学のオンライン授業に関する資料を拝見させてもらう機会がありました。その資料の中に、ある新聞記事の切り抜きが掲載されていました。以下に和訳とともに引用します。

Teaching by 'Phone Beats Flu Quarantine

SACRAMENTO, Jan. 29.—School teaching by telephone is today's latest educational wrinkle in California.

Long Beach has originated this novel innovation, according to Will C. Wood, state superintendent of public instructions, as a measure to beat the flu quarantine. The pupils in the high school there are doing home study work and holding regular telephone conversation with their instructors.

(*The Oakland Tribune*, Oakland, Ca., 29 January, 1919)

『電話を用いた教育はインフルエンザによる隔離に打ち勝つ』

サクラメント、1月29日 —電話を用いた学校教育はカリフォルニアにおける今日の教育における最新の名案だ。

州の公教育長であるWill C. Woodによると、ロングビーチ市はインフルエンザによる隔離に対抗する手段としてこの新しい技術革新の導入を始めた。彼の地の高校の生徒たちは家庭学習をしつつ、教師と電話で定期的に対話を行なっている(訳は筆者)。

この記事は1919年1月29日に発行された『オークランド・トリビューン』誌に掲載されたものです。今からおよそ100年前になります。そこで言う「インフルエンザ」とはおそらくスペイン風邪(英語ではSpanish Flu)を指しているものと思われます。休校になり、家庭での学習を行っていた生徒たちに教師たちは電話を使って対話の機会を作っていたようです。それから1世紀後の現在も事情は大きく変わっていないように思います。新型コロナウイルス感染症の流行を抑えるために世界中の教育機関は対面式の授業を中止せざるをえなくなりました。変わったことと言えば、1世紀前の電話の代わりにインターネットを用いた様々な情報通信手段が登場したことでしょうか。

しかし、先行事例が100年前となるとそれを経験した者は研究科には

一人もいません。私たちは、まさしく手探りの状態で日々刻々と変わる状況に対応することになりました。本研究科でも新学期の全ての授業をオンラインに切り替え、そのための環境が不十分な学生向けにインターネット接続用の教室を設営し、キャンパスに来ることが難しい学生用にWiFiルーターを調達するなどしてきました。教職員の努力により、第一学期はなんとか大過なく終えることができそうです。

研究面では、6月から「3密」を避けるなどの十分な対策を施すことを前提に、教員や学生の研究棟への入構を再開しました。8月現在でも、入構者は全て、事前に感染防止チェックリストを確認し、入構申請を届け出た上で研究室で活動しています。多くの学会が中止になり、研究会が開かれないなど、研究活動が制限されている中でも、本研究科の教員・研究員・学生はそれぞれの研究を継続しています。

その中で、まさに今回のパンデミックを扱うものとして、「COVID-19の流行にみる緊急時協力行動の発生構造とその促進」(研究代表者: 国際環境資源政策論講座・青木俊明教授)という研究が行われています。これは外出自粛やマスクの買い占めなどにおける協力行動と非協力行動の発生メカニズムを社会心理学的な方法で解明しようとする取り組みです。台湾やアメリカの研究者と協働し、日本・台湾・アメリカの行動様式の比較を行う予定です。パンデミック下において文化や政策が人間の協力行動にどのように影響するのか。とても「国際文化」的な研究であると思います。感染症との戦いはとすると医学・医療に限られたものと思われがちですが、協力行動という人間的な現象の研究を通して、このグローバルイシューの解決に貢献する研究であると言えます。

本研究科は、在校生に占める留学生の比率が高いことが特徴になっています。修士課程では約80%、博士課程では約60%となっています。今回のパンデミックは、私たちの学生受け入れにも大きな影響を及ぼす可能性があります。現状では外国から日本に入国することに制限がかかっており、本研究科を受験しようとしている外国在住者は仙台に来て試験を受けることができません。この課題に対して、私たちは入学試験における筆記試験をオンラインでの口述試験に変更し、仙台に来なくても受験できるように実施方法を変更しました。これが今年度限りのものとなるか、来年以降も継続するのかは、今後の情勢と私たち自身の検討にかかっています。

コロナと共にある私たちは、コロナ後も見据えながら、教育・研究・入試を含むあらゆる場面で、レジリエントな、すなわち柔軟で、弾力性があり、しなやかに困難に対応する組織であらねばなりません。

国際文化研究科長  
高橋 大厚





## 特集:本研究科の 新型コロナウイルス感染症への取り組み

2020年に入ってすぐに日本のみならず、世界中を新型コロナウイルスが襲いました。その収束の兆しはいまだに見えていません。この未曾有の事態にあっても本研究科は教職員一同が一致協力して学生の教育にあたってきました。本号においてはその一端をご紹介しますと思います。

本研究科では新学期開始早々、研究科長を本部長とする「研究科コロナウイルス感染症対策本部」が設置され、刻々と変化する情勢に対応してきました。

4月16日に緊急事態宣言が発出されて以降、本研究科はすべての授業をオンラインで行うこととし、教授会をはじめとする研究科内の会議も原則的にオンラインで実施しています。また、事務局も窓口は閉鎖され、職員は交互にリモートワークで勤務するなど、徹底した感染予防策を講じています。以下の表は、2020年4月から7

月までの新型コロナウイルス感染症に対する本研究科の主な取り組みを一覧にしたものです。

しかしながら、教員や仲間との対面での接触を厳しく制限する感染対策が学生の皆さんに多大な不便と不安を与えていることもまた事実です。

こうした状況を鑑み、本研究科では研究科ホームページにいち早く新型コロナウイルス感染症に関する特設ページを開設し、情報の発信と共有につとめてきました。また、6月以降には入構申請の条件のもとに教員と学生の研究科への立ち入りも可能になり、少しずつではありますが、研究・教育活動が再開されています。

以下では、本年4月から7月までの間の本研究科の新型ウイルス感染症予防策、学生への支援策、および学生アンケートの結果をご紹介します。

本学のBCPLレベル*	日付	研究科の対応など
レベル3(4月8日~4月16日)	4月8日	「研究科コロナウイルス感染症対策本部」の設置
	4月16日	新入生オリエンテーションをオンラインで実施
4月16日 政府が全国を対象にする新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言を発出(~5月25日)		
レベル4(4月17日~5月17日)	4月17日	オンライン授業の開始
	4月20日	研究科ホームページに特設ページを開設
レベル3(5月18日~5月31日)	5月22日	「新型コロナウイルス感染症防止対策管理体制」の構築
レベル2(6月1日~6月18日)	5月下旬~6月2日	学生アンケートの実施
	6月2日	入構申請フォームの使用開始
	6月17日	初のオンライン教授会開催
レベル1(6月19日~)	7月8日	令和3年度入学試験の実施方法の変更を発表
	7月27~29日	オンライン入試説明会の開催
	7月30~31日	オンラインによる各種研究発表会の開催

\*BCP(Behavior and Conduct Policy):「新型コロナウイルス感染症拡大防止のための東北大学の行動指針」

レベルが高くなるほど、教育研究活動や学内運営活動に厳しい制約が課せられます(最高はレベル5)。

たとえば、本学キャンパス内で複数の感染者が発生、または国から宮城県に緊急事態宣言が発令された場合、BCPはレベル4に引き上げられ、授業・学内会議はすべてオンラインに、教員の出張・学生の旅行は原則禁止に、学生の課外活動は全面禁止になります。

## ■ 本研究科の感染症予防策

本研究科では学生および教職員の健康を第一に考え、以下のような徹底した感染症予防策を講じています。

### (1) 接触・飛沫感染防止の徹底

- 研究室では、マスク着用、手洗い、入退室時の手指の消毒を徹底する。
- 研究室での機器の共有をできるだけ避ける。  
複数名で使用するものについては接触部分(ドアノブ、プリンタのスイッチなど)の消毒を徹底する。
- 部屋は常時窓やドアを2箇所以上開け、換気する。
- 1つの研究室は原則1名が滞在するようにし、複数名が関わる場合は時差入室とする。  
それが難しい場合は、2mの距離を確保する。打ち合わせはウェブ会議や電話を使用する。

### (2) 健康管理の徹底

- 構成員は入構の有無に関わらず毎日体温測定を含む健康観察を行い、記録する。
- 少しでも症状がある場合は大学に来ないで、自宅で健康観察する。
- 高熱や倦怠感、呼吸困難がある場合は研究科の対応マニュアルに沿って行動する。

### (3) 名簿管理と入退室の記録管理

- 研究科所属の全ての教員と学生の連絡先リストを作成し、緊急時の連絡網を構築する。
- 研究代表者(教員)は、研究科の建物に入構する関係者全員について入退室の時間を記録し、所定の様式により毎日総務係に届け出る。

### (4) 通勤通学時の感染防止

- 公共交通機関の利用はできるだけ避け、それが難しい場合は混雑時を避ける。
- 公共交通機関利用時はマスクを着用し、他人との距離をとる。大学入構時、帰宅時は手洗い、手指の消毒を行う。

### (5) 安全確保のための措置

- 部局で行われる研究の特性上、主たる活動は研究者が個別に研究室で文献等の資料を調査したり、コンピューター等の機器を使用したデータ処理や入力などの作業となる。その中で、入構者は上記の対策を実施し、感染防止に努める。
- 研究代表者は、所属する講座の代表教員と入構情報を共有し、非常時の連絡が取れるようにする。



事務室前の掲示



事務窓口



研究科玄関

## ■ 学生に対する支援

新学期は新入生・在校生のオリエンテーションから始まりますが、今年度は対面しての開催が困難となったため、新入生への資料の郵送と、研究科ホームページへのパワーポイントスライドによる各種説明の掲載・視聴という形で実施しました。

また、第1学期の授業はすべてオンラインで実施されることとなり、全学の対応に合わせて研究科でもオンライン授業の実施形態等について各教員に案内し、各教員はどのような形で授業を実施するかを検討しました。実施に向けた準備期間を設けるため研究科の学年暦を改訂し、4月20日から授業を開始すること、受講希望者は担当教員にまずメールで受講申込を行う等、各種手続きの変更も行いました。

また、全学の方針に従って、オンライン授業に関する技術支援を行うため技術支援担当教員を決め、Expert TAを各系1名ずつ3名配置して、支援体制を整えました。

オンライン授業の実施形態（リアルタイム会議形式、オンデマンドビデオ形式、資料配布形式等）のいずれを選択するかは受講する学生のインターネット環境にも依存するため、インターネット環境が十分でない学生が受講できるよう、研究科棟1階の4教室とマルチメディア教育研究棟6階に受信用自習室を設置し、整備しました。

その後政府の緊急事態宣言が全国に発令されたことにより、東北大学の行動指針（BCP）が4月17日付でレベル4に引き上げられて学生が登校できなくなったため、受信用自習室の使用はいったん出来なくなりましたが、その後レベル3からさらにレベル2に戻されたため、6月1日以降は再び使用可能になっています。

この間、自宅のインターネット環境が整っていない学生を支援するため、5月には学生の自宅のインターネット環境とモバイルルーターの貸与希望調査を行い、その結果を受けて研究科で5台のモバイルルーターを調達し、貸与を開始しました。これにより、学生の受講環境はおおむね整えられました。

その後授業は順調に進み、7月30日（木）31日（金）には学期末の各種発表会を迎えました。この発表会は、基本的に3つの系ごとにリアルタイム会議の発表会場を設ける形で実施され、当日通信環境の不具合等で終了できなかった発表については発表ビデオの収録と後日の公開という形に変更されました。いくつかアクシデントはありましたが通常の対面式よりもむしろ多くの参加者を得て質疑応答も活発に行われ、全体としては盛会のうちに終了しました（教務委員長 佐藤透）。



貸与されたモバイルルーター



マルチメディア棟6階受信用自習室



研究科棟1階受信用自習室

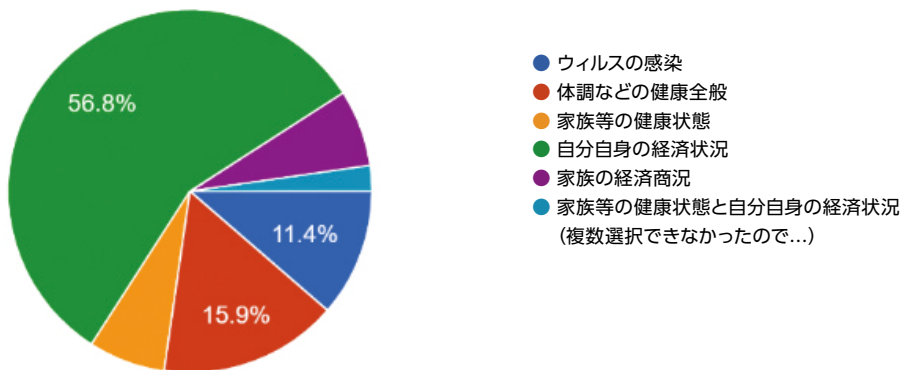
## ■ 新型コロナウイルス感染症拡大の学生生活への影響調査報告

新型コロナウイルス(COVID-19)感染症の感染拡大防止について東北大学ではさまざまな対策が講じられ、8月初旬現在での行動指針(BCP: Behavior and Conduct Policy)はレベル1にまで引き下げられましたが、いまだ予断を許しません。この前例のない状況のなか、国際文化研究科では、研究科が取り組むべき具体的な対応策を検討する目的で、研究科所属の学生がどのような問題や不安を感じているか、研究科にどのような期待を寄せているかを調査しました。

調査期間は本年5月22日～6月2日、本研究科の各講座の学生と英語コース(言語総合科学コース[IGPLS]、グローバルガバナンスと持続可能な開発プログラム[G2SD])所属の学生を対象に行われました(回答数は講座学生105名中66名、英語コース学生26名中18名)。主な質問事項は「生活面での不安」「授業・研究活動面での不安」で、結果は円グラフをご覧ください。

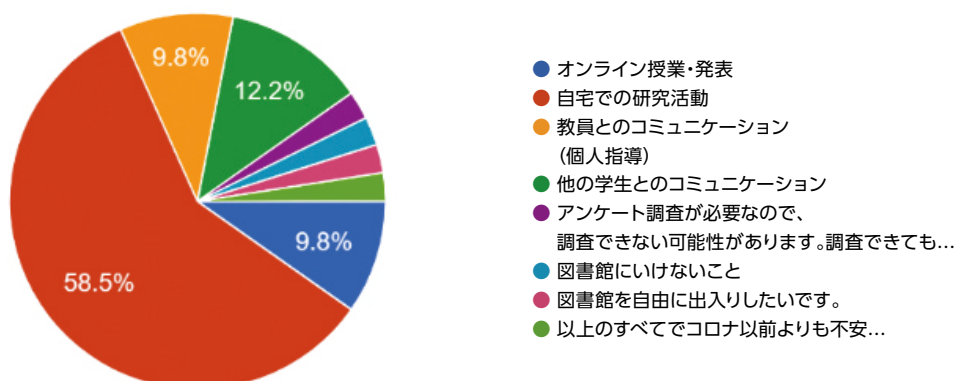
### 生活面での不安(講座学生)

「はい」と答えた方にお尋ねします。どのような点に問題・不安を感じていますか?(複数回答可) 44件の回答



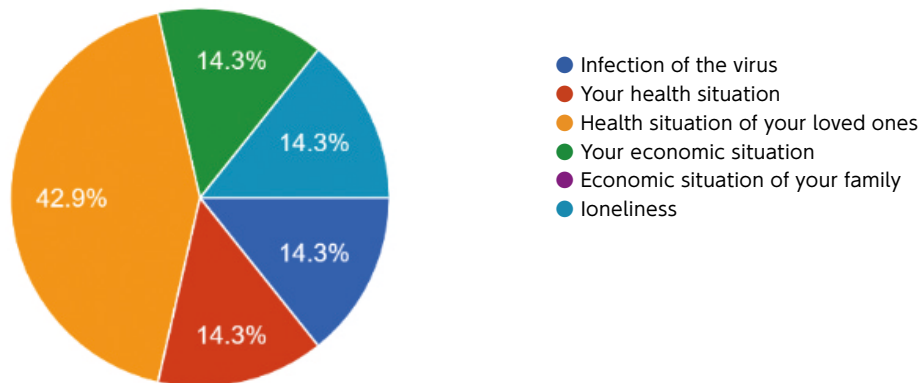
### 授業・研究活動面での不安(講座学生)

「はい」と答えた方にお尋ねします。どのような点に問題・不安を感じていますか?(複数回答可) 41件の回答



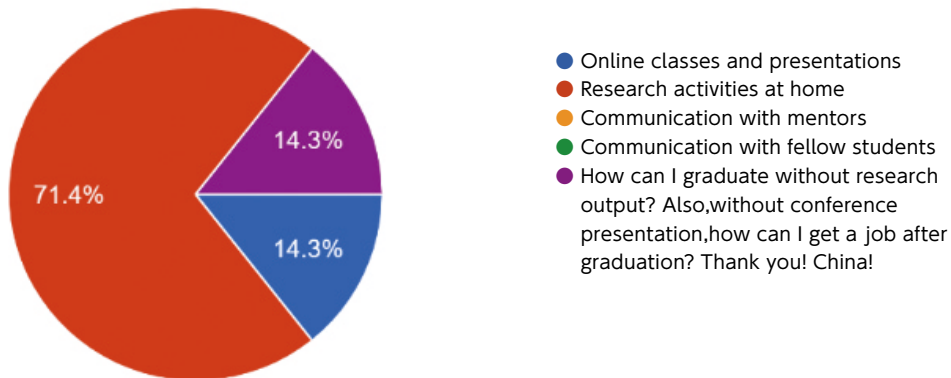
## 生活面での不安 (英語コース学生)

If yes,what are they?(Multiple answers allowed.) 7件の回答



## 授業・研究活動面での不安 (英語コース学生)

If yes,what are they?(Multiple answers allowed.) 7件の回答



特に目立った点としては、急激なアルバイト収入減による経済的不安、オンラインによる授業や演習等のネット環境への不安、図書館及び院生室の一時的閉鎖にともなう研究活動への不安があげられ、こういった不安に対する研究科の積極的な支援が期待されていることがわかりました。とりわけ、奨学金を受給していない学生(留学生も含む)の経済的不安は大きく、研究科としては東北大学、及び外部の緊急の奨学金についての情報収集と学生への周知、またリサーチアシスタント枠を有効に利用した経済支援などの対策

を講じました。また、情報不足、研究科スタッフと学生間のコミュニケーション不足からくる精神的不安をできるだけ解消するために、メールでのやりとりを密にしたり、Google meet等を用いてのリアルタイムでの演習、個別指導を推進しています。

この状態がいつどのように収束していくのか、いまだ先が読めない状況ではありますが、研究科では、できる限りの対策を行い、感染拡大を防ぐとともに、教育・研究活動が支障なく行われる環境づくりを目指しております。(学生・進路指導委員長 江藤裕之)

## 産学連携共同研究の紹介

### 銅ナゲット工程から発生する廃プラの適正処理と再資源化の環境影響と経済性評価に関する研究

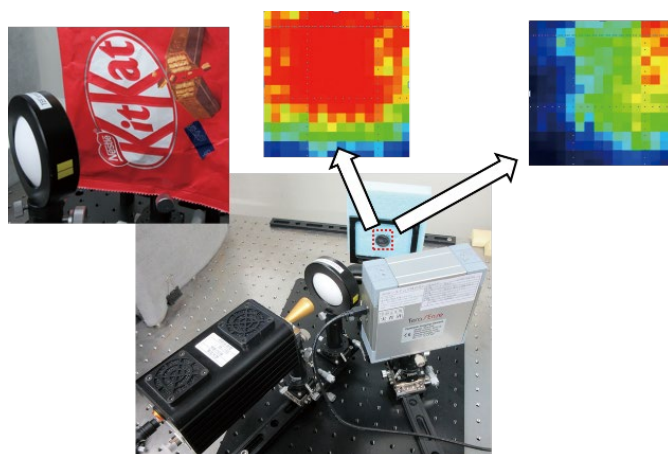
国際環境資源政策論講座では、今年4月から株式会社ヨシムラ（岩手県一関市）の受託を受けて産学連携共同研究（研究代表 劉庭秀教授）を実施しています。同社は、日本国内で流通される廃被覆電線の大半を処理している大手リサイクル会社です。

廃プラスチック問題は、使い捨て容器の増加、海洋汚染やマイクロプラスチック、レジ袋禁止、中国の廃プラ輸入禁止など、日常生活だけでなく、地球環境問題として注目を集めています。一方、2018年に始まった中国の廃棄物資源の輸入禁止政策によって、低品位の被覆電線の国内処理が重視され、リサイクル工程から発生する廃プラスチック類（PVC、PE等）の適正処理と再資源化が急務となっています。このような社会的ニーズに応えるべく、本学では、東北大学「プラスチック・スマート」推進宣言に基づき、昨年10月にプラスチックスマート戦略のための超域学際研究拠点（TUTRIPS）を設置しており、劉教授もこの拠点に参画しています。

本研究は、廃プラスチックの識別・リサイクル技術開発を支援しつつ、新技術の環境影響と経済性を評価することを主な目的としており、工学研究科の田邊匡生准教授（現職は芝浦工業大学教授）と共同でテラヘルツ波を使った画像解析技術を廃プラスチックの識別に応用する技術開発にも取り組んでいます。現在、廃プラスチックのリサイクルは比重選別、静電選別、X線分析選別、近赤外光による光学選別技術などを組み合わせており、高コストで選別効率も低い状況です（60～70%）。しかし、インドやフィリピンなどの開発途上国だけではなく、国内のリサイクル現場では未だに作業者の目視や触感による手選別に依存することがあります。テラヘルツ波による識別は廃プラスチックの高付加価値化だけでなく、プロセスが簡略化でき、低コスト、高効率化ができ、さらに金属除去による作業環境改善と安全確保も期待できます。



廃被覆電線のイメージ  
（劉教授撮影）



プラスチックの識別イメージ  
（田邊教授提供）



## ビッグデータで未来のリサイクル・ステーションをデザイン

### 資源リサイクルの行動分析に関する共同研究を開始

- 全国のスーパー等小売店舗に設置された回収ステーションの利用データ(約350ヶ所、延べ約600万人)を活用し、リサイクル行動のメカニズムを解明
- 人間行動科学に基づく未来のリサイクル・ステーションをデザイン・実用化
- 「持続可能な開発目標(SDGs)」の目標12・目標14・目標17に貢献

#### 【概要】

国際文化研究科では、2020年4月1日より、SKグループ(注1)、株式会社4510デザイン事務所(注2)とともに、ペットボトルや古紙などの資源リサイクル行動促進に向けた共同研究を開始しました。

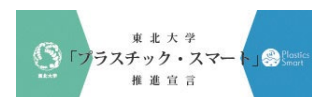
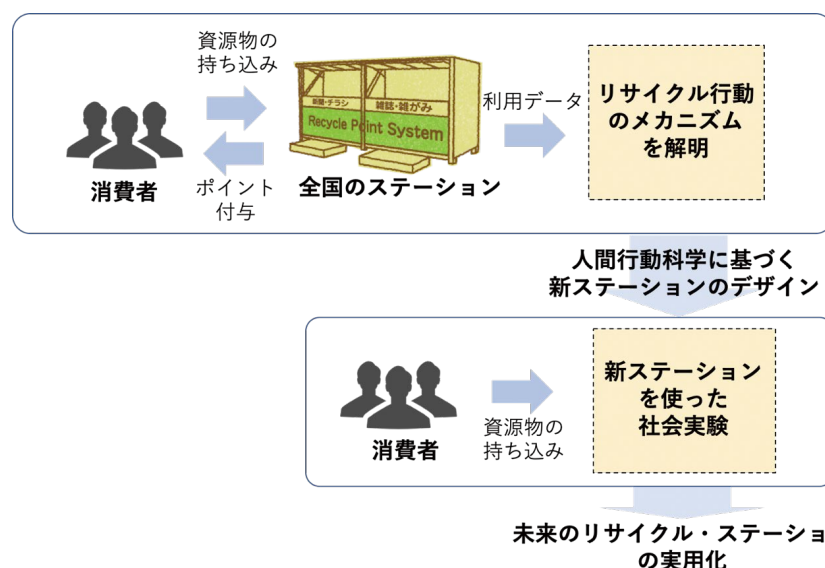
本研究は、スーパーなど全国の小売店舗に設置された約350ヶ所(2020年3月末時点)の資源回収ステーションが記録した、延べ約600万人のユーザーの利用データ等を活用し、資源リサイクル行動の背後にある心理的・経済的・社会的メカニズムの解明に取り組みます。また、分析結果に基づき、2022年度までに、人間行動科学に裏付けられた新しい資源回収ステーションをデザイン、社会

実験を通じて新ステーションの実用化につなげます。

本研究は、プラスチックスマート社会に向けた東北大学の取り組みの一環であるとともに、資源利活用の新たな地域モデルの構築に向けた産学連携プロジェクトの第一弾でもあります。また、資源回収率の向上や財政支出の削減等を通じて、政府・自治体の循環型社会関連施策に資するほか、海洋プラスチックごみの削減は海洋生態系の保全にも役立つなど、2030年までの「持続可能な開発目標(SDGs)」の達成にも貢献することが期待されます。

#### 【会社概要】

- (注1) 株式会社SKホールディングス(所在地:宮城県仙台市、代表取締役:齋藤孝志)、株式会社サイコー(同)、株式会社SKトレーディング(同)、株式会社ステップスナイン(所在地:宮城県仙台市、代表取締役:齋藤友和)  
事業内容:古紙・廃棄物の回収、中間処理、コンサルティングなど
- (注2) 所在地:京都府京都市、代表取締役:藤原仁志 事業内容:経営戦略コンサルティング・事業開発支援など



## 修了者からのメッセージ



言語科学研究講座

令和2年3月  
博士課程後期3年の課程修了

曾 曾

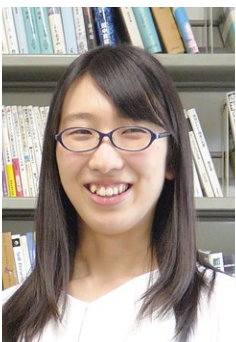
### 得られたものを届けていきたい

2014年3月に来日してすでに6年が経ちました。この6年間の留学生活は自分の人生にとって一番成長した時期だと感じています。「研究とは何か」

留学に来る前に、いろいろ不安や悩みを抱えながら、日本の大学院の先生たちに打診しているうち、2013年の秋に仙台へ来るチャンスがあり、そして後日の指導教員にもなった中本武志先生と面談ができました。すでに何度もメールで先生にご意見を求めましたが、初めての対面なので非常に緊張しました。しかし先生は終始笑いながら、留学や研究計画などについて沢山のアドバイスをしてくださりました。面談の最後に、「自分、もし受かりましたら私費留学で来ます」と話したら、先生は少し私を責めるような口調で「なんで奨学金に挑戦しないんですか」と言いながら、奨学金の情報を調べはじめました。当時、私の心の中では「もし受かったら絶対にここへ」と決意しました。

運も縁も運ばれ、翌年に国際文化研究科言語コミュニケーション論講座(後に言語科学研究講座として再構築されました)への留学を遂げました。先生たちの厳しい

ご指導と温かい見守りの中で、前々からずっと興味を持った日中両言語の対照研究を行い、研究生・博士前期課程・博士後期課程を経て、今年の3月に修了しました。研究生活を振り返ってみると、ここで最も得られたものと感じたのは、日本語や専門分野の知識よりも、「研究者・教育者たる者のあるべき姿を悟ること」だと思っています。研究をしながら教育活動を行う仕事をしたい私に、研究のマナー・研究倫理、批判的でロジック的な考え方、研究と教育への熱意など、大事なものを届けてくださいました。まだ一人前の研究者・教育者にはなっていませんが、今後は今までの受け取ったものを、次のジェネレーションに届けていきたいです。



国際環境資源政策論講座

令和2年3月  
博士課程前期2年の課程修了

菅原 優花

### 学び多き2年間

私が国際文化研究科への進学を志したのは、将来公務員を目指したことがきっかけです。大学では教育心理学を学んでいましたが、より社会、特に公共政策に直結するような心理学研究を行いたいと考え、国際文化研究科に進むことを決めました。

私が研究を行う上で大切にしたのはオリジナリティです。これは研究を進めていく中で、先生方から何度も指摘されたことです。私は進学した当初、ぼんやりとしたイメージがあるだけで、明確な研究テーマを決めていませんでした。そして興味のある分野の先行研究を読むなかでテーマを定めていったのですが、その際にどんなテーマなら「あたらしい」研究で、先行研究とはどのように違うのか、ということ意識することが重要であると気がきました。

研究は関係する先行研究を読むことから始まります。膨大な数の論文の中から自分の研究テーマに近いものを探すだけでも一苦労です。さらに学部生の頃は日本語で

書かれた論文しか読まなかったところ、英語論文を読まなくてはならず、英語を苦手とする私は大変苦労しました。その論文と自分の研究との違いや共通点、活かせるところ、といった情報を整理していきます。時には苦労して読んだ論文が、結局あまり活かさないということもありました。しかし、研究において前提となる理論には必ず先行研究の結果が必要であるため、この作業なくして良い論文が書けるはずがありません。

こうして苦労の末、自分のオリジナリティを見出し、修士論文を書き上げることができました。修士論文執筆に際しては指導教員の青木俊明先生をはじめとする国際環境資源政策論講座の先生方に温かいご指導をいただきました。

国際文化研究科での2年間はあっという間でしたが、学びの多い充実した2年間でもありました。修了後は研究から離れることとなってしまいますが、この学び・経験をこれからは活かしていきたいと思っています。



## 退職教員からの言葉



ヨーロッパ・アメリカ研究講座  
教授

市川 真理子

### “Globe” に寄せて

私は1999年4月に、当時、新しい研究科を作る予定であった言語文化部に赴任いたしました。仙台は私にとって縁もゆかりもない土地でしたが、東北大学が掲げる「研究中心主義」に強く惹かれてのことでした。その後、国際文化研究科に寄せていただくこととなり、そこで19年間お世話になりました。よき同僚や学生の皆様方のお蔭で、充実した日々を過ごすことができました。ここに厚くお礼を申し上げます。

今、この“Globe”誌に退職者として本稿を書かせていただくにあたって、縁もゆかりもないどころか、実は、国際文化研究科に深い縁があったのだな、としみじみ感慨に耽っております。私はイギリス・ルネサンス時代の演劇研究に携わるシアター・ヒストリアンとして、微力ながら、当時の劇場の構造や上演形態、そして演劇用語に関する諸問題に取り組んで参りました。したがって、『十二夜』や『ハムレット』など、シェイクスピアの円熟期

の作品が上演されたグローブ座(the Globe)の名は、私にとって愛すべき特別な語です。

グローブ座の建設(1599)に至るまでのほぼ2年間、シェイクスピアの劇団は大変な窮地にありました。シアター座(the Theatre)の借地契約が切れたまま更新してもらうことができなかったからです。シェイクピアたちは、思い切って、シアター座を取り壊し、その骨組みの材木をテムズ川南岸に運搬して、新しい劇場を建てるという策に踏み切りました。古材の骨組みで建てた劇場に「グローブ」と名付けたシェイクスピアたちの心意気を思うと、私は胸が熱くなります。

これからも細々ながら研究を続けていきたいと思います。私にとって“Globe”は大事な言葉であり続けることでしょう。国際文化研究科のさらなるご発展を心よりお祈りいたします。

(写真：“再建グローブ座近くのミレニアム・ブリッジにて”)



言語科学研究講座

教授

川平 芳夫

### 幸せな日々をありがとうございました

去る3月に定年退職いたしました。さしたる能力もない私が国際文化研究科の研究教育に携わらせていただけたことは私にとって実に幸せなことでした。研究科では言語生成論・言語科学基礎論・言語科学研究講座に所属し、言語研究の様々な課題に挑む院生諸君と生成文法などについての議論を楽しむことができましたし、全学教育においても生成文法の知見を生かし、移動関係や非顕在要素を含む構造を示すことで英語学習の面白さを学生諸君と共有できたからです。

ただ、年々歳々あらゆる場面で「そのうち何とかなるだろう」と高を括って過ごし続けた結果、研究・教育・その他において何の実績も残せずに退職を迎えたことが悔やまれます。私のこの反省が僅かでも学生諸君の参考になればと、全学教育の授業で読んだTali SharotのTED talk: the Optimism Biasの一部をご紹介しますと、私たちは好都合な情報は左下前頭回で、不都合な情報は右下前頭回で受容するそうですが、不都合な情報に接してもそれは自分には該当しないと考える人が80%もあるそうです。このことは目の錯覚と同様、意識することができないのですが、左下前頭回に電磁波を当てて矯正できることなどから、人間の脳の特性として確かに存在

すると言えるのだそうです。

この話が部分的にでも信用できるなら、この無意識の特性を理解し、自分に不都合な情報はそれが自分には当てはまらないと判断しうる合理的な理由がない限り決して無視しない、自分に好都合な情報はそれが自分にまさに当てはまると判断しうる合理的な理由がない限りまずはしっかりと確認する、という態度で臨むべきでしょう。さらに、このような態度は「青(赤)信号だ、進め(止まれ)」といったごく日常的な機会を利用して意識的に育むことができるように思われます。

これに対し、リスクを取らずして進歩や発展を期待できようかと反論されるかも知れません。しかし、心配ご無用。不可能に挑みそれを可能にしてきた人類の歴史が示す通り、まさに上のバイアスが勇氣ある人々の背中を押してくれるはずですから。

末筆ながら、長らくお世話になりました国際文化研究科、(これまでに在籍された全ての)教職員・学生の皆様に深く感謝申し上げるとともに、その益々のご発展を心より祈念申し上げます。



## 退職教員からの言葉



国際日本研究講座

教授

佐藤 勢紀子

### 研究科での19年間を振り返って

国際文化研究科には2001年4月に協力教員として加えていただき、19年間在籍しました。当初は言語文化交流論講座、改組後は国際日本研究講座に所属しました。その間、諸先生方、事務職員の皆様には大変お世話になりました。

私の本務先での業務は留学生に対する日本語教育でしたが、研究科で仕事できたことは、私個人にとってはもとより、本務先での業務にも大きな意味があったと思っています。

何より重要で思い出深いのは、講座で多くの学生の研究指導をする機会に恵まれたことです。いろいろなことがありましたが、私にとって、学生たちとの交流の記憶はかけがえのない宝物です。ほとんどが留学生でしたが、それだけに、本務の日本語教育を行う上でも、指導教員側の事情もよくわかった上で、より学生の身になって指導することができたと思います。

また、2006年度以来、研究科共通科目「研究のための日本語スキル」を担当させていただきました。そこでは

「サンプル論文」を用いた論文指導とプレゼン指導を行いましたが、各講座から参加した学生たちは非常に熱心に教室活動に取り組んでくれました。私もその授業実践を一つの足がかりとして、日本語教育におけるアカデミック・ライティングの研究を推進することができました。

研究科で行った国際交流活動も、忘れがたい記憶として残っています。韓国の中央大学校、中国の南開大学の先生方とのご縁がきっかけで、両大学との間で交流協定が結ばれることになったのは、私にとって大きな喜びでした。また、(一財)東北多文化アカデミーが主催するKEYAKIプログラムでも、毎年多数の研修生を受け入れていただきました。

私の東北大学での教員生活を振り返ってみますと、もし国際文化研究科での19年間がなかったら、格段に単調で実りの少ないものになっていたと思います。研究科での活動の場が得られたことに心から感謝するとともに、今後の研究科のますますの発展を祈念いたしております。





## 新任教員紹介



言語科学研究講座

准教授

ジスク・マシュー

四月から言語科学研究講座に就任したジスク・マシューです。専門は日本語史です。日本語における漢字・漢文の影響を研究しています。中でも漢文訓読という外国語である漢文を日本語に逐語訳することで生まれた様々な直訳表現を分析しています。今の研究テーマに着目したのは日本に留学した大学院生の頃でした。日本語では「鳴く」と「泣く」、「移す」と「写す」のように同じ語を複数の漢字で書き表し、その漢字によって意味を区別することがよくありますが、アルファベットという表音文字しかない英語の母語話者から見て、この現象に魅力を感じ、その原因を探ろうと思ったのが今の研究のきっかけでした。このような意味による書き分けは漢文訓読と深く関わっています。例えば、「うつす」という語は現代日本語で「移す」と書けば「移動する」、「写す」と書けば「書写する」という意味を表しますが、このような書き分けは平安時代の漢文訓読まで遡ります。さらに言うと、「うつす」は平安時代の和文や和歌で

「移動する」義でしか用いられないことから、「書写する」義は漢字から借用したものであると考えられます。つまり、古代中国語の「写」には「書写する」義の他に「移動する」義があり、この意味において「うつす」と共通していたため、「うつす」は早くから「写」の訓として採用されましたが、いつの間にか「うつす」に本来なかった「書写する」義まで取り入れたのです。日本語にはこのような漢字から借用された意味はたくさんあります。そして日本語は意味だけではなく、語構成や統語の面においても漢字・漢文から多大な影響を受けています。例えば、「あるいは(或)」、「および(及)」、「ならびに(並)」という語はいずれも漢文の直訳によるものです。漢文訓読とは漢字文化圏特有の現象で、通常の翻訳と違って、自由な解釈というより一字一字のいわば機械的な翻訳から成り立ちますが、このような漢文を直訳する漢文訓読の習慣は日本語表現を造る大きな原動力で、今日でもその影響が色濃く残っています。



## 受賞報告

- ヨーロッパ・アメリカ研究講座の吉田栄人准教授が、2019年10月、2019年度の日本翻訳家協会翻訳特別賞を受賞しました。この賞は吉田准教授の訳された『穢れなき太陽』(水声社刊、原著は、Sol Ceh Moo, "Sujuy k' iin/ Dia sin mancha", "Tabita y otros cuentos mayas", "Kaalitale' ,ku jijkunsik u jel puksi' ik' alo' ob / El alcohol tambien rompe otros corazones"?)が優れた翻訳書として認められ、贈られたものです。
- 国際日本研究講座後期3年の課程の亀山光明さんが、2019年10月14日、第5回中村元東洋思想文化賞の優秀賞を受賞しました。この賞は亀山さんの修士論文「近代日本仏教における戒律復興運動の展開－釈雲照の思想と行動を中心として」がその独創性および完成度において高く評価され贈られたものです。本賞は次世代を担う研究者の助成を目的として、中村元記念館(島根県松江市)が優れた卒業論文・修士論文を対象に与えるものです。
- ヨーロッパ・アメリカ研究講座後期3年の課程の阿部純さんが、2020年2月18日に名古屋大学で開催されたHistorians Workshop 10th Research ShowcaseでResearch Showcase Prizeを受賞しました。この賞は阿部さんの研究発表(「The Politics of Reparations: African American Attitudes Towards the Japanese American Redress Movement」)が最もクリアで説得力のある発表として認められ贈られたものです。
- アジア・アフリカ研究講座の朱琳准教授が、2020年3月、2019年度の東北大学優秀女性研究者賞「紫千代菫賞」を受賞しました。この賞は東北大学において優れた研究を展開する女性研究者に対して贈られるものです。今回の受賞は朱准教授のご研究である「近代日本の中国学の編成・連鎖・再生産に関する総合的研究」の高い学術性が認められたものです。
- 多文化共生論講座後期3年の課程の島貫悟さんが、2020年6月27日、第32回比較思想学会研究奨励賞を受賞しました。この賞は、学会誌「比較思想研究」第45号に掲載された論文「柳宗悦の民藝論における工人観と仏教思想－ウィリアム・モリスとの比較に向けて」が、その独創性及び将来性において高く評価され贈られたものです。

## 最近の著作から



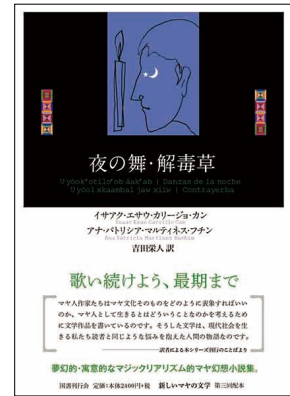
ヨーロッパ・アメリカ研究講座  
吉田 栄人 准教授



『女であるだけで』  
ソル・ケー・モオ著  
国書刊行会、2020年2月



『言葉の守り人』  
ホルヘ・ミゲル・ココム・ペッチ著、  
国書刊行会、2020年6月



『夜の舞・解毒草』  
イサック・エサウ・カリージョ・カン／  
アナ・パトリシア・マルティネス・フチン著、  
国書刊行会、2020年8月

これらの本は国書刊行会より「新しいマヤの文学」(全三巻)というシリーズ名で刊行されることになった、メキシコ先住民(ユカタン・マヤ語族)の現代小説を翻訳したものです。著作と言っても、ただかたかた文学作品の翻訳ですが、それは国際文化学的な研究の蓄積、特に先住民社会に関する文化人類学的な研究とユカタン・マヤ語に関する理解なしには到底できません。しかもメキシコ先住民の文学作品が外国語に翻訳され、シリーズ本として出版されるのは、世界広しと言えども、今回が初めてのことであり、世界的に見ても非常に稀有な、画期的な出来事です。外国の文学作品は多くの場合、英語による翻訳本が出て、一定程度の文学的な評価が確立した後でようやく、日本語に翻訳されて出版されるものですが、このシリーズ本はその二つのステップをいずれも踏んでいない。つまり、どの作品もまだスペイン語以外の「外国」語には翻訳されていないし、先住民文化研究者を除けば、メキシコ国外でその存在を知っている人は極めて少ない。今回私が日本語に翻訳した作品を対象にして研究論文・博士論文を執筆している研究者は米国を中心に結構な人数存在しますが、彼らは作品自体を自国語に翻訳して出版しようとはしない。それは、一つには彼らがマヤ語のテキストを完全には読みこなせないからなのかもしれない(原作にはスペイン語の翻訳が付いているのだから、それを使って翻訳をすることはできるはずです)、それ以上に、先住民文学を出版してもペイするかわからないことが大きな理由だと考えられます。

にも関わらず、欧米各国ではできないことがなぜ日本でできたのか。それは、この限られたスペースではとても語り尽くせない、私の国際文化学的な研究のあり方と関わる問題でもあるのですが、ここ

ではPROTRADというメキシコ政府の翻訳出版助成が得られたこと、そして私が翻訳した作品の価値を理解してくれた一人の編集者と巡り会えたという二つの幸運が重なったことが、私の国際文化学的な研究を実現する上で、決定的な後押しになったということだけを記しておきたい。

なお、この「新しいマヤの文学」シリーズに先立って、私は『穢れなき太陽』(ソル・ケー・モオ著、水声社、2018年)というユカタン・マヤ語による現代小説のアンソロジーの翻訳本も出版したのですが、同書は日本翻訳家協会による日本翻訳文化賞特別賞(2019年度)を受賞しました。この受賞は決して私一人の力(翻訳)で得られたものではなく、この作品に価値を見出し出版して下さった編集者、一読者としてこの作品に感動し同賞に推薦して下さった国際文化研究科同僚の市川真理子先生と妙木忍先生、そして翻訳書としての価値を認めてくださった審査員の方たちがいて初めて可能になったものです。外国ではまだ見いだせていないマヤの文学が持つ価値を、日本は世界に先駆けて認めたのだと言えば大袈裟でしょうか。ただ私は、日本の読者がユカタン・マヤという人々を他者とみなし、彼らの文化の中に自分たちとは違う何かを見つけ、そこに意味を見出して貰うことを意図してこれらの文学作品を翻訳したわけではないことを付け加えておかねばなりません。むしろ、読者の皆さんにはマヤに関する言葉と文化を身に着けた(もちろん完璧ではない)私の翻訳を通して、マヤ人の立場から世界を見て欲しい。読者が作品の中の人物(あるいは語り手)になりきったとき、私たちと彼らという境界そのものは消えてなくなり、そこで語られる物語は自分自身の物語となるはずで。



## 令和2年度科学研究費補助金採択一覧

8月24日現在

氏名	課題番号	研究種目	新・継	研究課題名	備考
佐藤 雪野	17H02227	基盤研究B	継	EUにおける難民の社会統合モデル—ドイツ・ハレ市の先進的試みの可能性と課題—	補助金
池田 亮	17H02487	基盤研究B	継	1950年代の中東と北アフリカにおける冷戦と脱植民地化	補助金
岡田 毅	18H00683	基盤研究B	継	大学入試改革を契機とする新しい高大接続英語教育用eラーニングパッケージの開発研究	補助金
大河原 知樹	19H01404	基盤研究B	継	民法、民事訴訟法におけるイスラーム法と中東法の国際比較研究	補助金
Godart Clinton	19H01197	基盤研究B	継	越境する日蓮主義の基礎研究—トランスナショナル・ジェンダー・スピリチュアリティ	補助金
ジスク マシュー・ヨセフ	19H01265	基盤研究B	継	多言語による日本語学用語辞典および日琉諸語の用例に対するグロス規範の作成	補助金
繁田 真爾	19J00772	特別研究員奨励費	継	近代日本における「監獄教誨」成立史の研究—犯罪・刑罰・宗教—	補助金・特別研究員(PD)
亀山 光明	19J21102	特別研究員奨励費	継	近代日本仏教と戒律—宗教言説史におけるプラクティスの再検討	補助金・特別研究員(DC1)
KLAUTAU Orion	19F19301	特別研究員奨励費	継	近世ヨーロッパにおける宗教の再概念化と日本のキリスト教宣教	補助金・外国人特別研究員
呉 佩遙	20J21655	特別研究員奨励費	新	近代日本における信仰言説の研究—仏教・歴史・国家	補助金・特別研究員(DC1)
KLAUTAU Orion	20HP5018	研究成果公開促進費 (学術図書)	新	村上專精と日本近代仏教	補助金
中本 武志	17K02670	基盤研究C	継	日中バイリンガル幼児のコード・スイッチングに見られる普遍的制約	基金
勝間田 弘	17KT0117	基盤研究C	継	途上国のNGOとグローバル・ガバナンス	基金
勝山 稔	18K00310	基盤研究C	継	民間の視座を導入した中国通俗文学の「自国化」の研究—受容文化の多角的戦略—	基金
市川 真理子	18K00365	基盤研究C	継	近代初期イギリスの商業劇場における楽屋正面壁の構造と使用方法に関する総合的研究	基金・名誉教授
高橋 大厚	18K00520	基盤研究C	継	言語における経済性条件の再検討	基金
Jeong Hyeonjeong	18K00776	基盤研究C	継	外国語学習を通じた情意や社会性の育成：認知神経科学からの検証	基金
杉浦 謙介	18K00820	基盤研究C	継	外国語eラーニング教材の仕様最適化—学習効果・使用者評価・学習実態に基づく研究—	基金
志柿 光浩	18K00821	基盤研究C	継	大学外国語教育プログラム内評価に適合したスペイン語スピーキング能力測定手法の開発	基金
野村 啓介	18K01020	基盤研究C	継	第二帝制下フランス外交の異文化経験と極東戦略に関する基礎研究	基金
大窪 和明	18K04392	基盤研究C	継	点検情報の価値を考慮した口バスト最適点検・補修計画モデルの開発と適用	基金
青木 俊明	18K04382	基盤研究C	継	潜在的限界集落地区における社会的ネットワークを活用した生活の質の維持・改善	基金
山下 博司	19K00075	基盤研究C	継	シンガポールにおける民族集団の多元的共存と宗教・文化政策—宗教間関係を焦点に—	基金・名誉教授
鈴木 美津子	19K00439	基盤研究C	継	ロマン主義時代の文学作品に見られるウォレン・ヘースティングス表象	基金・名誉教授
藤田 恭子	19K00490	基盤研究C	継	多言語性の否定と肯定—ルーマニア・ドイツ語文学に見る言語アイデンティティの諸相—	基金
小野 尚之	19K00679	基盤研究C	継	名詞から動詞をつくる—事象統合による語彙創造のしくみ	基金
黒田 卓	19K01012	基盤研究C	継	イラン系ムスリム知識人がみた近代世界	基金
渡邊 竜太	19K01049	基盤研究C	継	チェコ/ドイツ国境地域における20世紀地域社会史	基金・GSICSフェロー
勝間田 弘	19K01519	基盤研究C	継	ASEAN外交と国際関係の理論	基金
井川 真砂	20K00381	基盤研究C	新	マーク・トウェイン晩年の批評精神—まなざしは<笑いの武器>のその先へ	基金・名誉教授
坂巻 康司	20K00489	基盤研究C	新	近現代フランス演劇における<祝祭>概念の総括的検討	基金
小原 豊志	20K01032	基盤研究C	新	異端のデモクラシー—初期アメリカ合衆国における人民主権論のポピュリズムの展開—	基金
朱 琳	20K01468	基盤研究C	新	清末知識人と明治日本の政治学—東アジアにおける連鎖と比較の政治思想史	基金
妙木 忍	17K17596	若手研究B	継	医学的なまなざしと女性の身体—解剖学と展示の政治性をめぐる国際比較研究—	基金
土屋 陽一	18K12775	若手研究	継	国際機関予測の評価と民間経済主体への影響に関する研究	基金
堀田 智子	18K12418	若手研究	継	日本語学習者のヘッジ表現の習得過程—中間言語用論の観点からの考察—	基金・GSICSフェロー
周 振	18K12440	若手研究	継	中国語学習を支援するためのデータベースの構築	基金・GSICSフェロー
佐藤 正弘	19K13674	若手研究	継	市場を介した消費者間の影響関係のネットワークがイノベーション普及過程に及ぼす影響	基金
中山 真里子	19K14468	若手研究	継	日英バイリンガルのL2表記表象の解明	基金
佐野 正人	17K18476	挑戦的研究(萌芽)	継	東アジアにおける戦後歴史認識の横断的研究—戦後初期と1990年代を中心に—	基金
劉 庭秀	19KK0272	国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化)	継	遊牧民のエネルギー・環境問題の実態解明と持続可能性の再構築—HEVの有効利用策—	基金

## キャリア講習会

国際文化研究科では、毎年、修了生を招いて就活や仕事のことを話していただくキャリア講習会を実施しているが、昨年度は11月27日に李敬淑さん(宮城学院女子大学准教授)にお越しいただいた。まず、李さんから「閉ざされた道を歩むこと—大学院生から大学教員までの小さな個人史」というタイトルで、韓国で修士課程を修了してから日本留学を決意して国際文化研究科博士課程での学業、現在の宮城学院女子大学での仕事までの体験を生き生きと具体的な資料や写真、トピックなどを挙げて興味深くお話しいただいた。例えば日本留学を選択したりするキャリア上の重要な選択において、徹底したリサーチを通じて緻密な戦略を立てて道を切り開いていく様子は、参加者たちの心にも響いたものだったようである。その後参加者との質疑討論も熱心に行われ、李さんから具体的なアドバイスなどの懇切な質疑が行われた。(佐野正人)



## 第26回公開講座 「国際文化基礎講座」 「近代フランスの外交と異文化理解 —幕末日本と脱植民地化期のアフリカ—」

市民を対象とした第26回公開講座を令和元(2019)年11月9・16日に開催しました。外交という優れた政治的なイベントを、本研究科の特色を活かして、異文化理解、交流、交渉の観点から2名の教員が講義を行いました。

9日の講義では、ヨーロッパ・アメリカ研究講座の野村啓介教授が「フランス外交と幕末日本—フランス外交官たちのみだりな『日出ずる国』 Empire du Soleil-levant—」の題で、フランスの外交官たちが、日本をどのように観察し、いかにして任務を遂行しえたのかといった問題を考察しました。講演後の質疑応答も活発でした。

16日の講義では、国際政治経済論講座の池田亮准教授が「フランス植民地帝国の変容と植民地独立—チュニジアとモロッコの事例から—」の題で、フランスが決断した政治上の大きな方針転換、植民地の独立容認という謎に、チュニジア・モロッコの独立過程の分析から迫りました。日本人には馴染みの浅い地域にも関わらず、熱心に聞き入る受講者が目立ちました。(大河原知樹)

## オンライン入試説明会

本年は新型コロナウイルス感染症予防の観点から7月末のオープンキャンパスが全学的に中止となりました。そこで、本研究科では7月27日、28日、29日の3日間にわたりオンラインによる入試説明会を開催しました。説明会には国内外からのべ25名の参加があり、入試実施委員長および各講座に在籍する学生から本研究科の概要や特色が説明されました。参加者からは多くの質問が出され、本研究科への関心の高さがうかがえました。なお、オンライン入試説明会は今後も開催する予定ですので、研究科ホームページのチェックをよろしくお願いいたします。(小原豊志)



## 入学を希望される皆様へ

春季入学試験は、令和3(2021)年2月9日(火)、10日(水)に行われます。

本研究科は、柔軟な思考力と広い視野および一定の語学力を有して、国際舞台で活躍できる創造的研究者または高度専門職業人になろうという明確な目的意識を持った学生を求めています。なお、上記の入学試験は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点からすべてオンラインで行うことになりました。詳細については、本研究科ホームページ内の『東北大学大学院国際文化研究科を受験予定の皆様へ「令和3年度入学試験の実施方法等の変更について」』をご覧ください。

お問い合わせは、本研究科教務係において受け付けています。

連絡先

東北大学国際文化研究科 教務係  
TEL: 022-795-7556 / FAX: 022-795-7583  
E-mail: int-kkdk@grp.tohoku.ac.jp